



かみさんこう
上三光清流の会（新発田市/新潟県）

地域特性

新潟県新発田市中心街から東に約10km離れ、山の裾野に広がる上三光集落では山林や畑は重要な地域資源として活用していました。やがて、葉タバコの生産の終了に伴い、荒廃農地が増加し、山林も放置されるようになりました。さらに兼業化が進み農家が減少、少子高齢化とともに世代断絶や価値観が多様化し、自己所有農地への意識の希薄化も進みました。従来の農村コミュニティにおける共助の意識が衰退するようになりました。また、荒廃農地等の増加にともない、サルの出没増加を招き、集落における鳥獣被害の増加という負の連鎖が広がっていました。

きっかけ

鳥獣被害の増加を踏まえ、上三光集落を含む川東地区で対策協議会を設立し、平成23年に集落電気柵を設置しました。また、平成24年には農林水産省の「農地・水保全管理支払交付金（現：多面的機能支払交付金）」の活動組織として「上三光清流の会」が設立されました。

何を目指したか

上三光清流の会では農業施設や農村の環境保全を行うにあたり、一番必要なのは「農村自体の再生」と考えました。農業体験交流など地域資源の活用を様々な形で行うことを通じて、持続可能な農村をつくる必要と考え、「新たなムラづくり」を目指しました。

何をやったか<現状維持>

生産者と消費者との交流を促進する農業体験や、荒廃農地の解消、ビオトープ整備などを行ってきており、GISを活用して可視化した集落資源データ管理は、「現代の古文書」として現状把握や管理の共有化を促進しています。また、野生鳥獣被害対策を考える「集落環境診断」では、サルやイノシシの被害の要因となっている柿などの放任果樹や荒廃農地の問題を共有し、結果として集落による農地の共有管理の取組につながりました。診断結果を踏まえ、山林の伐採・整備による緩衝帯づくりや、放棄された果樹を用いた「柿酢づくり体験」などの交流イベント企画等も行っています。

主な課題

<人（主体）>

取組開始時点で、兼業農家等の増加により従来の農村コミュニティにおける共助の意識が衰退していたことが課題でした。

→解決策は後述

<人（主体）>

野生鳥獣被害対策を考える上では、専門的な知見が必要でした。

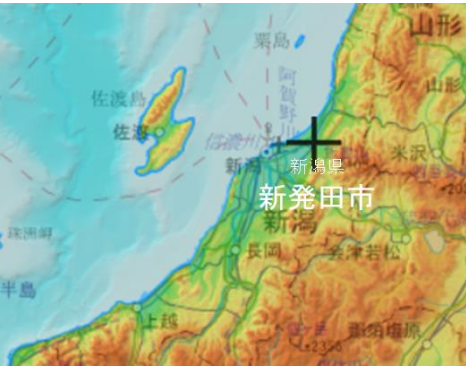
→解決策は後述

関連予算

多面的機能支払交付金、鳥獣被害防止総合対策交付金、環境保全型農業直接支払交付金、森林・山村多面的機能発揮対策交付金（林野庁）、特別交付税（総務省）、強い農林水産業づくり支援事業（市）、会費（自治会）

問い合わせ先

新発田市農林整備課
里山保全係（0254-33-3118）



●期待される効果

国土管理	・ 荒廃農地の新たな利用、緩衝帯の整備
自然共生	・ 野生鳥獣被害の軽減、景観の改善等
防災・減災	・ 農地や森林の国土保全機能の向上
地域づくり	・ 交流イベントや産直の実施 ・ 集落環境診断によるコミュニティ強化

●取組のステップ

平成23年?

集落電気柵の設置

平成24年?

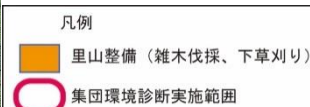
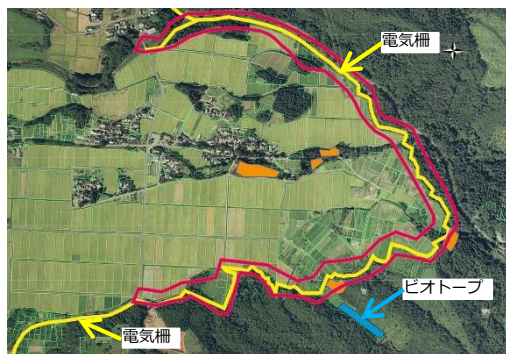
地域資源の活用

今後の展望

- 管理の行き届いていない里山や畑の増加がサルの出没と農業被害を拡大させ、増えた荒廃農地などは集落の自然環境や景観の悪化につながっていました。

サルによる被害防止対策のため、農林水産省「鳥獣被害防止総合対策交付金」を活用して、平成23年に集落電気柵の整備を、集落を挙げて取り組みました。

- 世代断絶や兼業化により地域資源が伝承されなくなり、農村の衰退を加速させる恐れがあったため、「現代の古文書」としてGISを活用した集落資源データ管理を行っています。情報を可視化し、共有できるようにすることで、農地や水路の計画的な管理が可能になるほか、管理に対する住民の合意形成を図りやすくなっています。



上三光集落周辺の様子 (第5回国土管理専門委員会資料より)

- 地域資源の情報と体験の共有を経て、野生鳥獣被害対策として平成28年に「集落環境診断」を実施し、放置された山林や農地がサルの生息環境になっていることなどの実態を集落住民で共有することができました。

診断結果を踏まえ、山林の伐採・整備による緩衝帯（境界域）の整備、荒廃農地の再生のほか、放置された果樹を用いた「柿酢づくり体験」、「電気柵見学ツアー」など「対策と地域資源活用の両立」につながる交流イベントも実施しています。

また、放任果樹や荒廃農地を含めて、集落による農地の共同管理にも取り組んでいます。

- 今後、上三光清流の会では情報収集、将来のリスクとして問題を共有、ビジョンの策定と合意形成をもって、地域資源と人が繋がる集落をテーマに、交流を促進させつつ、集落内外の協力を得ながら、持続可能な農村をつくっていきます。

●得られた知見（課題と対応詳細）

<人（主体）>

□農業体験交流の実施

農村コミュニティにおける共助の意識衰退に対応するため、平成24年に設立された上三光清流の会では、地域の資源や農業文化を活用して、農村と都市の交流を促進し、価値の発見と共有を図り、地域の活性に繋げようと農業体験交流を事業として行っています。

この会の取組が、「気づき」や「発見」が「問題解決」に繋がりが易く、その後のビオトープ作りや荒廃農地の解消、里山の整備と発展しました。さらに活動は、「ムラを綺麗にしよう」「ムラを住み易くしよう」などと、意識の向上に大きな役割を果たしています。

<人（主体）>

□GISによる見える化

共助の意識衰退に対応するため、GISを活用して農地の所有者、耕作者、用水路、地域の歴史・文化、集落電気柵、荒廃農地の情報を一元管理しています。集落の実態をデータで把握することで、情報の共有化が図られ、合意形成がしやすくなりました。地域内の建設会社出身者は、GIS操作経験を活かしてデータ入力等を担っています。

<仕組み>

□地域・専門家・行政による取組

野生鳥獣被害対策を実施するには専門的な知見が必要なため、地域住民（上三光集落）が取組の主体となり、NPO法人新潟ワイルドライフサーチが集落環境診断や科学的な生態調査・分析等を担い、専門家・新発田市が支援・協働する仕組みとすることで、効果的なものになりました。

集落環境診断では、野生鳥獣被害の原因を地域内で共有し、問題解決のために集落ぐるみで取組を行っています。

●仕組みや体制

